

大阪における祭礼空間の分析 Analysis of Festival Space in Osaka

石田 圭太^{1*}, 吉川 眞², 田中 一成²

Keita Ishida^{1*}, Shin Yoshikawa², Kazunari Tanaka²

¹ 大阪工業大学大学院工学研究科, ² 大阪工業大学工学部

¹Graduate School of Eng., OIT, ²Faculty of Eng., OIT

1960年代に始まる高度経済成長にともない画一的かつ大規模な都市開発による社会基盤の整備が行われ、利便性を重視した街並が形成された。利便性の向上は生活環境を豊かにしたが、急速な都市化の進行により各地の歴史的環境は失われてきている。そのため、歴史の名残を示す祭礼からかつての姿を現代の都市空間に垣間見ることは魅力のひとつとなっている。今日では「不景気のなか華やかなまつりで街を盛り上げ、商売繁盛につなげたい」という理由から、廃止になっていた神輿渡御など、迫力のある巡行が地域住民によって復活することも少なくはない。そのような都市空間と密接に関わる渡御祭・神幸祭は、現在注目を浴び、地域を元気付ける観光要素としても大きな役割を担っている。

そこで本研究では、文化・歴史性が顕著に表現される渡御祭・神幸祭を対象とする。また、祭礼が描かれている絵図を抽出することで過去と現在の繋がりを明らかにし、過去から継承されてきた祭礼が、現代の都市空間での見え方を把握することで、時代の変化と同様に変容してきた都市空間と祭礼との関係性を見出すことを目的とする。

具体的に、広域な分析では地域の三大祭りとして七代奇祭を取りあげ、祭礼の時期と目的から分類することで、日本の典型的な祭礼の特徴を把握している。その結果、このような祭礼は夏季に多い夏祭りであることが分かった。夏祭りは、中世から近世にかけて流行した疫病を祓う夏越しの大祓い神事である。そのため、現代に継承された夏祭りの多くが中世から近世を起源にもち、なかでも大阪の夏祭りは当時の文化を反映した祭礼と高く評価されている。そのため、大阪の夏祭りに対象を絞り研究を行う。

近世の大阪は、早くから開けた土地として、交易の中心地となり、天下の台所として江戸・京に続き三都の一つに称され、現在の大阪の文化や都市基盤の形成に大きく影響した。また、現在の大阪は摂津・河内・和泉の旧3ヵ国に含まれており、本研究室で所有している明治中期二万分一複製図と輯製二十万分一図を幾何補正し、トレースをすることで当時の大阪の行政界を地図上に定位している。

次に、江戸時代後期の観光ガイドブックである摂津名所図会・河内名所図会・和泉名所図会を基に複製版として1980年に出版された日本名所風俗図会を用いて分析を行っている。具体的に、図会に記載されている神社と描かれている祭礼を網羅的に抽出し、整理することで数量把握を行っている。さらに、抽出した神社に位置情報を付与し、地形データをオーバーレイすることで空間把握を行っている。その結果、現在の大阪市にあたる住吉郡、東成郡、西成郡、大坂部(大坂郷)の地域に、祭礼が最も多く絵図として描かれていることが分かった。

狭域な分析では、大阪を代表する夏祭りのなかでも陸渡御と船渡御の2つの異なる渡御祭・神幸祭が含まれる大阪天満宮の天神祭を取りあげ景観分析を行っている。天神祭は、日本三大祭りの一つに数えられ、毎年約130万人の来客数で賑わう。また、951年が起源とされ、1000年以上の歴史がある。そのような天神祭は、現代に至るまでに渡御ルートが大きく変化した。その大きな原因には、地盤沈下があげられる。地盤沈下によって船渡御の際、神輿が橋を潜れなくなったことがルートの変化に大きく影響した。さらに、高度経済成長期の急激な都市開発によって築かれた建物群が祭礼を見る際、阻害要因となっていると考え、現代の都市空間での見え方を可視・不可視分析によって明らかにしている。分析に必要な数値表層モデル(Digital Surface Model: DSM)は研究室で構築された、グリッドサイズ1mのものを使用し分析を行う。また、観測される点を天神祭のメイン神輿である玉神輿の上端に設置し、渡御祭の巡行ルート上5m間隔に配置し分析を行う。観測点される点は神輿の高さを考慮し、陸渡御は4m、船渡御は2.6mに設置して、可視頻度値を算出することで、視覚的な影響範囲を把握している。

おわりに、広域な分析では日本の典型的な祭礼の特徴の把握や江戸時代から継承されてきた大阪の祭礼を抽出することができた。狭域な分析では、天神祭における玉神輿の可視領域を把握することができた。また、陸渡御は船渡御に比べ視点場が限定されることを明らかにした。さらに、高層ビルなどの建物群は阻害要因になる一方、祭礼時の貴重な視点場に成り得る可能性を見出した。今後の課題として、3次元モデルを用いたの景観シミュレーションが挙げられる。3次元空間での視覚的な分析には、景観分析が重要かつ基本となる。そのため、2次元的な把握だけでなく、絵図や浮世絵など過去の史料を参考に3次元都市モデルの構築を行い、現在の都市空間との景観対比を行うなど、GISとCADを統合的・融合的に活用した3次元分析へと展開する必要がある。

キーワード: 図会, 祭礼空間, 景観変遷, 可視・不可視分析

Keywords: collection of pictures, festival space, landscape transition, visibility analysis